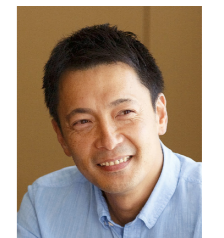


課題2 「就職」問題 グローバル人材の



(株)ベネッセ・キャリア 取締役
大竹 航
おたけわたる ● 1974年生まれ。2001年(株)インテリジェンス入社。人材派遣・紹介など一貫して採用関連事業に携わる。2015年(株)ベネッセ・キャリア取締役(新卒事業本部長)に就任。

語学力の高い学生、留学経験者を増やそうとする大学の取り組みは、企業が求めるグローバル人材像と本当にマッチしているのか? キャリア支援のプロに聞いた。

企業が留学経験者に求めるものとは?.

選考解禁日の前倒しが留学生の就活に影響

2016年度新卒者の就職活動(就活)においては、企業による選考活動の解禁日が8月から6月へと前倒しになりました。そのため、前年度と比べて内定が出る時期は早まりました。新卒者の求人数も増えており、当面は売り手市場が続くと考えられます。

選考解禁日が前倒しになったことで、留学した学生の就活にも影響が出ています。3年次の9月から留学するケースを考えると、半期留学であれば、帰国時期は1、2月になり、会社説明会やエント

リーシート提出に間に合いません。しかし、欧米の大学に1年間留学する場合、学期末が6月になるため、選考解禁日に日本にいないというところもあり得ます。

留学経験者枠を設けて秋採用を実施する企業もありますが、多くは一般採用で定員の大部分を満たし、留学経験者枠では極めて優秀な人材だけを採るといった形になっています。6月というタイミングでの帰国が、一般の学生と比べて不利になることは否めません。

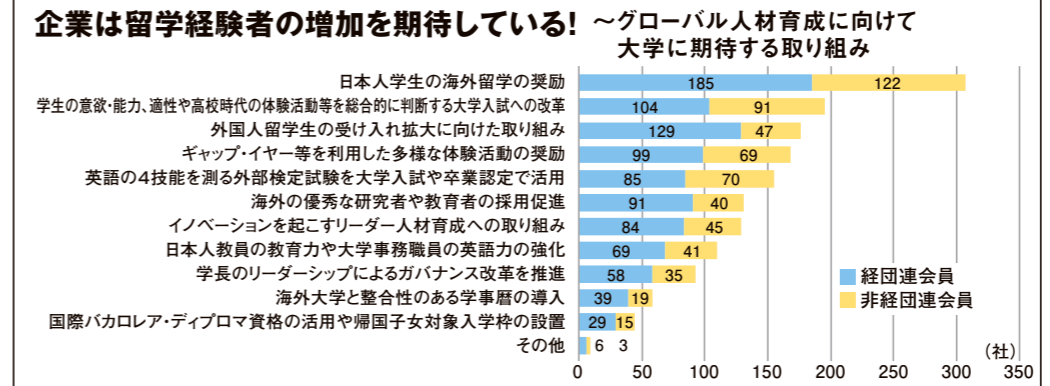
一方で、企業が留学経験のある学生を求めているのは間違いありません。経団連が2015年に発表したアンケート調査によると、

「グローバル人材育成に向けて産業界が大学に期待する取り組み」として、「日本人学生の海外留学の奨励」が最も多く挙げられています(図表)。企業は「学生時代に海外経験を積んでほしい」という意向を持っているのです。

留学の事実ではなく獲得したスキルを評価

留学経験がある学生は、就活時にその経験を企業へのアピール材料として使いたがります。しかし、留学が採用時の評価に結びつかないケースもあります。

「留学経験があること」「英語が堪能なこと」だけをアピールするのでは、なかなか評価されません。極端な言い方をすれば、「海外留学を経験した」という事実が、「部活やアルバイトに取り組んだ」と



取材文/本同学

という話と差がありません。企業は、海外で学んだからこそ獲得できた考え方や、スキルを評価します。「海外留学で、どのような気づきや価値観に触れ、いかに成長したのか」を伝えることが重要なのです。

英語力に関しては、入社時にTOEIC等のスコア基準を設けている企業は、実はそれほど多くありません。中小企業の場合、英語がまったく話せない新入社員を自前で育てるコスト、労力をかけられませんか、英会話のスキルを持つ学生を優先的に採用するケースもあります。しかし、大手企業は、英語力を向上させるのは

入社してからでも遅くはないと考えており、パーソナリティや考える力を重視します。1、2か月程度の短期語学留学の経験そのものをアピールするだけでは、就職には結びつきにくいでしょう。

明確な目的意識を持った留学が学生の成長を促す

では、企業が評価する海外留学とはどのようなものでしょうか? 「グローバル人材」の定義は企業によってさまざまですが、基本的には「社内のイノベーションに貢献できるような人材」と言える

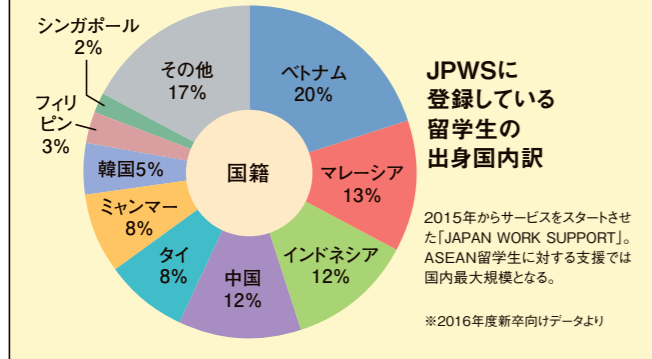


と思います。そのため、採用時には学生の「主体性」や「課題発見・解決力」に注目します。

こうした力は、なんとなく、留学しても身に付くものではありません。①目的を明確にしたうえで海外に飛び出す、②体験に基づいた気づきを得る、③帰国後に、海外で得た気づきを成長につなげるために努力する、というプロセスを経ることが重要です。

ASEANからの留学生がライバル、そして同僚に

近年、ASEAN出身の留学生を採用する日本企業が増えている。一度採用した企業は、その後に採用枠を増やす傾向があるという。外国人留学生向け就職支援サービス「JAPAN WORK SUPPORT (JPWS)」の運営にも携わる大竹によると、現状は「言葉の壁」があるため、同じ能力なら日本企業は日本人を採用するものの、ASEAN出身の学生の優秀さや勤勉さを企業は高く評価しており、特に理系の専門知識を持った留学生への採用ニーズは高まっているという。今後の就活ではこうした留学生が日本人学生のライバルになり、かつ就職後には同僚になる。大学はそれを見越した取り組みをすべきだろう。



評価されにくい短期語学留学についても、語学修得のみを目的にするのではなく、「海外の学生とディスカッションして、主体性を磨く」など、プラスαの目的も併せて持つていけば、意味ある留学になります。このような目的で留学した学生ならば、語学力だけではなく、どのような力が伸びたのかをアピールできるはずですよ。

留学支援だけでなくキャリア観の育成も

我々は日本で学ぶ外国人留学生の就職支援も行っています(コラム参照)。その経験上、日本人学生が「将来のキャリアを見据えたうえで、留学に臨んでいるのか」という点に疑問を感じています。

日本の大学で学ぶ外国人留学生の大多数は、来日前から「将来どのような仕事に就きたいのか」を明確にイメージしており、約6割が日本での就職を希望しています。だからこそ、彼らは積極的に日本文化を理解しようと努めますし、高い学習意欲を持っています。

一方で、日本人留学生のほとんどは、日本での就職を望んでいません。海外留学は手取り早く語学力を身に付ける手段であり、「海外に行けば、なんとなく視野が広がるのではないか」と期待しているようにも見えます。このようなマインドで留学するのは、非常にもったいないと思います。

留学は就活のアピール材料ではなく、生涯を通じたキャリア形成に役立つものです。大学は留学支援だけでなく、留学前後の期間を含めて、学生のキャリア観を育成する取り組みにも力を入れる必要があるのではないのでしょうか。